

# 定年退職を迎えて

技術統括  
向井 一夫

2010年度末で、技術センターが発足して7年が経ち、私は広島大学に在職したうちの六分の一を技術センターで過ごしたことになります。

在職期間の六分の一を過ごした工学部には、ピーク時（1980年）に42名いた技術職員が、2004年3月末時点で23名（1998年の自然系大学院整備時に工学部 類の電子物性工学講座、 類の発酵工学講座から先端物質科学研究科に配置換の4名を含む）になっていました。1969年に「行政機関の職員の定員に関する法律（総定員法）」が施行になって以降、5年計画を基本として、11次にのぼる削減計画が実行されてきたのです。工学部での削減方法は、 類～ 類、共通講座・学校工場、事務部で順番に行われていました。技術センター化後も、2004年度から5カ年で5名の削減を行っています。人員削減は、今後も厳しい状況が続くでしょう。技術センターとしての削減への対応については、部局、施設、各センター等、配属先との関係も大切なことですが、全学支援の観点から計画していかなければならないと思います。

技術センターとして採用された技術職員は、常勤職員枠76名のうち22名（割合は約29%）で、2～3年後には三分の一を超えます。全学的支援に向けてスキルの有効・効率的活用を目指す技術センター化後の採用であります。半数近くの方は研究室に配属（ほぼ専任）の形になっていて、配属先と技術センターの関係が理解しにくく複雑な思いをされていたのではないかと思います。

組織体制確立に向かって精一杯走ってきましたが、個別の対応については、半ばに到達しないまま定年を迎えることになり申し訳なく思っています。

「できることからやる」、「やれることからやる」、「やるべきことからやる」。これは、私が技術長、技術副統括、技術統括を受ける時に、企画調整部会で述べた抱負です。

それからは、職責に応じた立場立場で、今やるべきことは何かを考え、いつも「強い技術職員になろう」、「技術職員は、技術センターから逃れられない」の二つを念頭に、ある意味思うように動かさせていただきました。何故ここまで頑張らなくてはならないのか、何故自分がやらなければならないのか、の繰り返しでしたが、山本技術センター長、藤久保前技術センター長、事務部の皆さんに我々がやろうとしていることを理解していただき改善が進んだ時の達成感に幸福を感じて、更にもう一步と頑張ってきたと思います。勇木技術副統括、部門長の皆さん、技術職員の皆さんのご協力、学校工場の皆さんの支えは、力になりました。感謝、感謝です。

技術センターでの7年間は、やっぱり長かったです、やっぱり短かったです。